◆特別記事◆

大神神社における神仏分離について

神仏習合の伝統を引きつぐ大神神社の神宮寺が廃仏毀釈の動きのなかで徹底的に破壊された真の理由を探る

アントーニ・クラウス

□Antoni Klaus
□1953年（昭和28）生まれ
□1969年～1970年、日本交換留学生。フライブルク大学卒業後、ミュンヘン大学助手、ハンブルク大学教授を経て、現在トリア大学教授。研究対象は日本宗教史、神道神話

▲大神神社拝殿（桜井市）

■序

今日、多くの住宅が立ち並ぶ奈良盆地を東に向かう旅人は、かなり遠くから、その美しさが万葉集にも詠まれている緑濃い大和の山並を目にすることができる。さまざまな現代的な建物やビルなども、いま訪れているこの地が歴史の宝庫というべき場所であることを覆い隠すことはない。日本古来の伝承を熟知している者には、「天の香具山」、「畝傍」「笠縫」「巻向」といった地名は不思議となつかしいものに思われるのである。この地に存在する無数の寺院、神社や天皇家の古墳なども太古を偲ばせる。

平野が突然なだらかな山地に変わる、桜井からほど遠からぬ場所に、ほとんど完璧な円錐形をしていて、旅人の目を惹く緑濃いひとつの山がそびえている。これこそ三輪山、別名「みもろ」とか三室と呼ばれている山である。

日本の他の多くの山と異なるのは、この山が単なる名所であるのみならず、この山自体が宗教的崇拝の対象とされているという事実である。考古学的研究によって明らかにされていることであるが、この地には古代の祭式の中心地が存在したのである。ただ、その祭式の開始された時期と起源は前史の闇に埋もれたままである。

それに対して、三輪山が持つ格別の宗教的意義については、歴史的に伝承されてきた神道神話の中に保存されている。この山の神体、出雲の大神大国主の神の姿を変えた現れとしての「大物主の命」については『古事記』と『日本紀』が報告している。この日本神道の出雲系統の中心となる神の祭式は、三輪山の麓にある日本でもっとも重きをなす神社のひとつである大神神社で執り行われるのである。この「大神」神社は、古代神話の言い伝えをもとに、「日本最古の神社」という名誉を持つと自負している。

このような主張の歴史的な根拠付けについては一般に疑わしく、またいくつかの点では否定されているのではあるが、それでもこの神社には、この神社を並はずれた神道の聖地たらしめている数多くの特性が見られる。たとえば、境内の中心の神社にはご神体を祭った「本殿」がなく、ただ祭礼が執り行われる「拝殿」しかない。それは、この三輪山自体が、神々の山であり、ご神体として聖なる不可侵な存在であって、この山自体が大物主の神体として信仰の対象になっているのである。このことが三輪の宗教観の中でこの山が占める重要性を示している。

三輪の神社はずっと、天皇家の宗教的、政治的立場との密接なつながりによって勢力を維持する大神社のひとつであり続けてきた。それゆえ、天皇家の支配が強まると三輪神社の影響力と威信も増大した。逆に、天皇家の衰微した時代には、この神社の地位もそれに応じた影響が及ぶことになった。そういうわけで平安時代には、大神神社は白河天皇が定めた（永保元年へ一〇八一）格式ある二十二社の一つに教えられた。

そして大神神社がそれと同様の重要な位置を占めるのは遙か後の近代、すなわち明治維新になってからであった。明治元年（一八六八）以降の天皇支配の復活と、それにともなう神道を維新日本の国家宗教にしようとする試みの結果、三輪神社の重要性は再び増大することになった。すでに明治四年の五月には大神神社は新たに定められた神社の格の最高の位置、「官幣大社」のひとつに列せられた。この神社がこの地位を失うのは昭和二十年（一九四五）十二月十五日の占領軍の「神道に関する訓令」による国家神道の正式な廃止によってである。

大神神社の自己理解にとって格別の重要性が、一八六八年から一九一二年の明治時代に認められることが明らかになるのである。明治時代の事件、とりわけ明治維新にともなう宗教政策的な諸々の措置が、実際にはどれほど深刻なものだったかということは、しかしながら、この問題に関心を寄せる私にもなかなか明瞭な姿を見せようとはしないのである。このことはしかし、訝しく思うにあたらぬのかも知れない。というのもここでは、この神社の歴史の闇に閉ざされた一章、大神神社が「帝国の第一級神社」に格付けされる過程で生じた悲劇的事件に目を向け、そ

れを解明しようとしているのであるから。

■大神神社における「神仏分離」

明治元年以降の国家による神道のプロパガンダのそもそもの発端をなすのは、よく知られているように同年三月二十八日の新政府の布告、神道の神社における神と仏の切り離しを指示する布告であった。このいわゆる「神仏分離令」ないしは「神仏判然令」といわれるものは、さっそく行政組織を通じて公布され、地方のレヴェルでは、部分的には仏教施設への恐るべき暴力行為と結びつく形で（廃仏毀釈であるが）、実行に移されたのであった。これによって、仏教と神道の宗教的共存（神仏習合＝日本に興った神道と外来思想の仏教が融合混和したもの、本地垂迹もそのひとつ）という千年以上の長きにわたるプロセスに、突然、終止符が打たれることになったのであった。

すでに大昔から日本国中にいわゆる「神宮寺」と呼ばれるものがあった。神道の神社と共生する仏教寺院で、その教義は、日本古来の神と仏教世界の仏陀や菩薩とを同一視する混淆主義的なモデルに基づいていた。とりわけ平安時代のふたつの大きな仏教の宗派がこの形態に土台を提供した。つまり、「本地垂迹説」（神道の神は、本地の仏・菩薩がこの世の姿をとって現れた〈垂迹〉ものとする）を持つ天台宗と密教教義に基礎を置く「両部神道」（真言密教と結合して発達した神道説。大日如来を本地、天照大神をその垂迹とした）を持つ真言宗の二派である。

そして、まさに三輪山が、宗教の共生、神道・仏教そして民間宗教の密接な、ほとんど分かちがたく思われる結びつきの好例を長きにわたって提供していたのであり、この場所は、いかなる類の宗教的フアナティズムとも相容れないように思われたのであった。ところが、まさにこの神社においていわゆる「分離」すなわち歴史の中で培われてきたあらゆる仏教的側面の除去が明治初年頃に徹底的になされたのであり、その結果、今日ではこの神社の偉大な仏教的、混淆主義的過去を物語るものは何も残されていない有様である。

当時、大神神社に付随して存在した「大御輪寺」「浄願寺」「平等寺」の三つの神宮寺の中で、ただひとつの建物だけが残された。その建物は摂社「若宮」また の名を「大直禰子神社」であり、大神神社の祭司一族の先祖であり大物主命の子孫である「太田田禰子」を祭っている。しかしこのような割り振りは、明治元年春以降のものである。それ以前、この建物は、天平時代の作で、高い美術史的価値を持つ大御輪寺の本尊「十一面観音」を祭る本堂であったのである。

明治維新の分離令によって大御輪寺の長い仏教的混淆主義的な歴史は終わりを告げる。すでに明治元年三月十七日には新政府の命令により、神社に仕える僧職である「別当」「社僧」の還俗が指示された。その直後の同年四月には、大御輪寺の僧たちの還俗が行われている。彼らは今や新政府の決めた神道関係の法律に基づいて、「神主」または「社人」として勤めなくてはならなくなったのである。そして、その翌月（五月）には寺の宝物の運びだしが始まった。

どの程度までこの寺の宝物が救い出されたのかという点については完全には明らかになっていない。ただもっとも重要な、貴重な宝物の在処は知られている。大御輪寺の本尊であった十一面観音は桜井市の南方の山寺、聖林寺に保管された。この堂々たる仏像は、聖林寺では「客仏」として、現在、独立した建物に安置されている。ただ、この仏像が三輪に由来することは、聖林寺の発行するしおりには一言も記されてはいないのである。

明治元年の夏の終わり頃になると、大御輪寺をはじめ、あとで述べるふたつの神宮寺に対する態度はより厳しくなる。九月二十七日には、奈良県から三重の塔、護摩堂を含む大御輪寺の全施設の取り壊しの許可が取得されている。そのような極端な措置は「分離令」の範囲をこえており、政府はすでに同年の四月に仏教施設の侵害を厳しく禁じていたにもかかわらず、この申請は認められたようである。

混淆主義的、仏教的な性格の三輪神道の中心であった大御輪寺の重要な寺院群は、しだいに強大になる大神神社の片隅に置かれた小さな摂社大直禰子神社、つまり若宮へと縮小されてしまったのである。そして明治四年五月十四日に、この大神神社は新たに定められた神社の格のいちばん上級をなす官幣大社に格上げされるにいたるのである。この時点では、もはや大御輪寺や他の神宮寺は問題にもされなくなっている。

もうひとつの神宮寺、浄願寺については、三輪のちっぽけな末社「浄願稲荷神社」という名前がその過去を偲ばせるのみである。これは、大神神社の社域の南端にある稲荷神社である。ここには明治維新まで尼寺が建っていたのである。この尼寺は、江戸時代は大御輪寺の保護を受けていたのであるが、明治元年春の「神仏分離令」にともなう動きの中で、大神神社側からの希望で、同年五月十二日に大御輪寺の本寺である西大寺の直轄に移された。ところがその五日後の五月十七日には、大神神社は尼たちの還俗の許可を願いでている。

数ヵ月後の九月八日には、新たな願いが「南都役所」にも出されている。このあと浄願寺が消滅するにいたる詳しい経過については正確な資料はない。最近出された吉田靖雄の論文（「大神神社の神宮寺」一九九一年）も、ただ手短に「この寺は明治二年大御輪寺とともに廃寺になった」としか述べていない。

大御輪寺と浄願寺の寺跡は、今日ではほとんど識別できないが、もうひとつの神宮寺である「平等寺」の寺跡はさらに見つけるのが困難である。かつては三輪山最大の寺院群であり、その広さからして大神神社そのものよりも大きかった平等寺も、完全にこの地から消されてしまった。東西五百メートル以上、南北三百三十メートルにわたり、三輪山の南斜面に広がっていた平等寺の寺域の何も残されなかった。

この平等寺は、本堂・護摩堂・御影堂・一切経堂・開山堂・赤門・鐘楼堂など多くの建物を持っていた。かつては大御輪寺とともに三輪山の仏教的混淆主義的な営みの中心をなしていた場所を、今日では果樹園を含む森が占領している。けれども平等寺は、大御輪寺とは違って、真言律宗の本山である西大寺にではなく、

長い間興福寺の管轄下にあった。そして興福寺も神仏分離時代に、春日大社との紛争のなかで、多大な被害をこうむったのであった。

最近出された大神神社の年代記は、平等寺の終焉の経緯について、大御輪寺のそれと比較して極端にわずかのことしか述べていない。その広がり、僧侶・建物・宝物の数からみて、大御輪寺よりはるかに重要であるにもかかわらず、乏しい資料しか見いだせないのである。つまり、明治元年九月二十日に、神祇官が大神神社からの平等寺僧侶還俗の願いを認めたと書かれているのである。けれど僧侶たちが実際に「社人」になるのは明治三年五月のことになる。このことは同年十二月二十七日の神祇官役所によって公布されている。ただこれだけで、大神神社にとっての平等寺の歴史は閉じられてしまっているのである。平成二年(一九九〇)十一月二十三日の天皇明仁の大嘗祭の日までを扱っているこの年代記には、二度と平等寺の名前は表れない。

疑いもなく、劇的な状況の下で遂行されたはずの寺院の建造物の破壊に関しては、ただ「一八七〇年四月に僧侶の還俗と並んで寺の建物が取り払われた。地元の者達が一八七〇年七月に開山堂を再建しようとしたが、成就しなかった」と書かれているにすぎないのである。吉田靖雄もただ、「この寺の仏具は明治二年に移転され、本堂は翌年取り壊され、寺領は一八七一年四月に国有化(収公)された」と述べているにすぎない(『大神神社の神宮寺』一九九一)。梅田義彦と西野乙は、昭和五十一年に刊行した『大神神社史』の中で、平等寺の終焉について、簡略に「この寺院は掃き清められてしまった。それに対して大御輪寺の本堂は太田田禰子神社、別名若宮に改造された」と報告しているだけである。

今日、三輪には平等寺という名前の寺院があるが、それは単に由緒ある名前を名乗る昔の平等寺とは何の関係もない、昭和五十二年に造られたものにすぎない。

もっとも貴重な美術品で、かつての平等寺の本尊であったとされているのが不動明王(アカラナータ)である。これは密教で大日如来の罰を執行するとされている五人ないしは八人の明王のひとりである。大御輪寺の本地仏とされていた十一面観音はすでに見たように聖林寺に移管されたが、不動明王が当初どこに移されたかは謎である。ようやく明治六年に、この像は昔からよく知られたお寺のひとつである長谷寺に迎えられ、明治四十一年には国宝に指定され、戦後は「重要文化財」に指定されている。けれどもこの不動明王は長谷寺そのものに迎えられたのではなく、その前に立つ塔頭「普門院」に置かれているのである。明治七年一月十四日にそこの住侍が不動明王像を本尊として受け入れたからである。それ以来、三輪の憤怒の形相の不動明王は普門院で管理されている。

■三輪山の神宮寺の歴史について

十一面観音と恐ろしい不動明王というふたつの像は偉大な過去を物語っている。三輪山は仏教と神道の結合の場所であったのである。この地には、「三輪(流)神道」と呼ばれる混淆的教義の宗教的神学的な中心が存在したのであった。密教、すなわち真言宗教に基づく両部神道の一変種として、三輪神学は、三輪山とその神を太陽神アマテラスと並べ、両者は「一体」であると、同一視したのである。伊勢神道に近い教義に則って、この両者は密教の本尊である大日如来(マハーバイロカナ)の顕現とされたのである。

けれども、三輪山の仏教と神宮寺の歴史は中世の三輪神道によって始まるのではなく、その歴史は遙か日本の国家形成期にまで遡るのである。大神神社から出版されている一九七六年の正式な神社の歴史が詳しく述べているように、三輪の最初の神宮寺である大三輪寺は、その由来の報告ならびに今日の太田田根子神社(若宮)の考古学的発掘調査によって、初期奈良時代のものと確認されている。この神社は、平安時代にはまた三輪寺という名でも知られていたが、鎌倉時代の初期に存立の危機を迎えたのであった。

この寺の再興に功あった人として、大和地方の多くの寺の再興を行ったとされる有名な僧侶叡尊(一二〇一～一二九〇。死後、興正菩薩と称せられる)の名があげられる。弘安八年(一二八五)、叡尊は大三輪寺の名を「大御輪寺」と改めた。三輪におけるお寺の創設についての由来は鎌倉時代、文保二年(一三一八)の「三輪大明神縁起」に見ることができる。叡尊はその晩年のかなりの期間をしばしば三輪で過ごし、この地につながりが深かった。「縁起」によれば、叡尊は伊勢神宮参詣のおりに、天照大神と三輪大明神が一体であることの悟りに達したとされている。

叡尊は、真言律宗の創始者として、かつての南都七大寺のひとつである西大寺を真言律宗の本山として再興したとされている。それもあって、大御輪寺もまたこの宗派に組み込まれ、明治維新まで西大寺の末寺とされることになった。

ところが三輪の神宮寺の歴史は、叡尊とほぼ同じ時期にもうひとりのすぐれた仏教の師がこの地で活躍したという事情によって著しく込み入ったものになっている。それは、平等寺の創始者として、三輪の混淆主義的宗教の発展に大きな影

気鋭渾身の力作！ 書下し歴史小説

紀伊國屋文左衛門

羽生道英

■B6判／定価1700円

贈収賄――いつの世も変わらずはびこるこの悪商法の代表者ともいえる紀伊国屋文左衛門。その波乱に満ちた生涯を活写し、賄賂とは、悪とは何かを鋭く問う問題作!!

青樹社

〒101 東京都千代田区三崎町2-6-7
☎03(3264)6902 FAX03(3262)9262
＊定価表示は税込です

興福寺（右）と醍醐寺の三宝院

響を及ぼした慶圓（？～一二二三）、つまり「三輪上人」である。慶圓に関するもっとも早い記述は、建長七年（一二五五）、慶圓の死後三十三年目に彼の弟子によって編まれた「三輪上人行状」に載っている。慶圓に関する後代の記述はみなこの書に基づいているのである。

この書によれば、慶圓は鎮西（九州）の人で、生年は不明であるが、さまざまな伝えによると一一四〇～一一五〇年に生まれている。彼は大和地方を転々としながら「大般若経」を学んだのち、石清水八幡宮へ行き、つづいて三輪に赴き、そこで「霊光」を見て悟りを得たとされている。慶圓は、専門書では三輪神道の実質的な創始者とみなされている。彼は、密教真言に基づく混淆主義的な彼の教義を広めるために、三輪に「道場」を作った。この道場は、まず「三輪別所」という名で天福元年（一二三三）に初めて文献に見えるが、まもなく、嘉禎二年（一二三六）に初めて文献にその名の載る「平等寺」という名前で広く知られるようになる。この道場はひじょうに栄え、鎌倉時代の末期には大御輪寺をも凌ぐようになる。室町時代になると、平等寺は興福寺の管轄下に入ることになるが、しかし、またそれだけではなく京の醍醐寺との密接な関係をも保ち続けた。

このふたつの寺との二重関係が、後にこの寺のふたつのグループ、つまり興福寺に従う「学衆」のグループと、醍醐寺――より正確には醍醐寺の三宝院に従う「禅衆」のグループへの分裂につながることになる。室町中期から禅衆方の勢力はしだいに強大になってゆく。この事実はここで扱っている問題にとってひじょうに重要だと思われる。というのも真言醍醐宗の本山である醍醐寺は、明治維新にとりわけ迫害にさらされることになる「修験道」の室町時代における宗教的中心地であったからである。それで三輪山の平等寺もまた、興福寺とのつながりとは別に、中世末期以来、とりわけ修験道の中心地として有名だった。山伏たちは、大峰山や金峰山という南の山岳地帯へ向かう道筋にあたるこの聖なる山において儀式を執り行ったのである。

これらの事実と思い合わせるとき初めて、あの不動明王が、かつて三輪山で最大だった神宮寺である平等寺にとって持つ意味が明らかになってくる。周知のとおり、修験道に見られるような、不動明王の崇拝は、他の宗教集団には見られないものである。

初期のキリスト教の布教者たちの目には、山伏は「悪魔崇拝者」に見えたという。それはおそらく恐ろしい形相の不動明王像に触発されたものだったのだろう。修験道の伝説的な始祖役行者（奈良時代の呪術師）は、彼の崇拝者たちから不動明王の生まれ変わりと見做されていたのである。修験道にも鎌倉以来ふたつの流れが存在した。天台宗に近い「本山流」と、大和や紀伊の山中で儀式を行った真言宗に近い「当山流」であった。疾病退散、厄払い等の呪術に携わった山伏たちは、明治初期の宗教政策によってとりわけ大きな打撃を被った。真言・道教・民間信仰などの混淆した修験道の教義と実践は、整理された国家儀式とは相容れなかったからである。明治三年には、修験道は法的には仏教に属するものと決められ、さらに明治五年十月十七日には最終的に政令によって、独立した宗派として禁止された。

私には、まさにここに、なぜかつて三輪最大の神宮寺であった平等寺が、神仏分離時代の廃仏毀釈の動きの中であれほど徹底的に根絶されたのかという問いを理解するための本当の鍵が隠されているように思われる。現在の三輪山研究においても、大御輪寺の十一面観音像に象徴される、中世の哲学的な三輪神道に、ひじょうに大きな関心が寄せられているのに対し、長谷の不動明王の恐ろしい姿に見られる、三輪山の混淆主義の別の側面、山岳宗教・山伏・組織化された修験道に関する指摘は実際上、皆無である。

■結論

たとえば美しい秋の日に三輪山に近付き、それから神社へ登る人は、この土地の静けさと美しさを讃えずにはいられない。古い社や信者たちが、太古からの信仰によれば、蛇の姿をして木の根元に現れるといわれている大物主の神に酒や生卵を供えている「巳の神杉」、これらすべてが訪れる人を引き付ける。この土地とその歴史的な意義により深く携わる者は、『古事記』の神話、三輪山と出雲伝説の分かちがたいつながり、そして木と蛇と生命の木の図像学的つながりの中に認められる太古の宗教性という大きなテーマを考えることになる。このような土地で、破壊と荒廃のことを考えることは容易ではない。

この今日、事実上、目に見えなくなっている三輪山の別の側面を理解するためには、人はこの神社を立ち去らなくてはならない。かつて三輪の神宮寺に安置されていた仏像は、三輪から離れた流謫の地、聖林寺の脇堂や、広大な長谷寺の片隅の普門院において、黙したままで、三輪山ではもう聞き取ることができないもうひとつの歴史を語っている。それは宗教の多様性と、宗教的寛容の歴史であると同時に、またそれは、真理にいたる道が常に複数存在する状態の中での、厳しい対決の歴史でもある。（了）

歴史読本

7月号　目次

シリーズ　人物検証　天下の副将軍　**水戸黄門**

テレビ人気時代劇『水戸黄門』の主人公『水戸光圀』の素顔！
テレビだけではない講談・映画・小説世界の「水戸黄門」！
何度見ても面白いテレビ『水戸黄門』のすべてがわかる！

【第1部／水戸光圀の真実】◇はじめてわかった徳川光圀の全生涯◇
総論　徳川光圀の実像と人気の秘密……瀬谷義彦　14
1章　光圀出生前後の藩情／出生にまつわる謎／世子としての日々／『史記』「伯夷伝」との出会い……鈴木暎一　22
2章　『大日本史』編纂着手／光圀第二代藩主就封／「彰考館」開設／徳川綱吉の将軍継嗣……小松徳年　34
3章　朱舜水・心越の招聘／西山荘への隠居／藤井紋太夫事件／七十三歳の大往生……佐久間好雄　46
水戸光圀エピソード選　25／31／37／43／47／55
【第2部／水戸黄門伝説】◇懐かしの名場面、あの興奮をもう一度◇
総論　水戸光圀から水戸黄門へ……縄田一男　62
黄門漫遊伝説の由来……野口武彦　66
講談と黄門……加太こうじ　76
講談本・講談雑誌の人気者水戸黄門……林　邦夫　82
大衆文学に生きる水戸黄門……縄田一男　90
銀幕を飾った時代劇スターの水戸黄門……永田哲朗　98
【第3部／テレビ『水戸黄門』の世界】◇毎週月曜夜8時に必携◇
『水戸黄門』第23部（8月1日放送開始）撮影現場訪問記……編集部　112
三代目黄門〈佐野浅夫さん〉水戸黄門を語る……（聞き手）編集部　116
『水戸黄門』最後の謎——人物篇&ストーリー篇……宝泉　薫　118
番外篇　脇をかためた名優たち……編集部　130
月形版テレビ『水戸黄門』を憶えていますか？……（語り手）石濱　朗　132
永久保存版　テレビ『水戸黄門』完全データファイル……編集部　141
テレビ『水戸黄門』プロデューサー回想記……逸見　稔　166

読者のページ　256　読者の声　260　イベント通信　261
新説・奇説　224　私のベストテン　263
歴史ニュース速報　248　&歴史ニュース〈都道府県別〉総索引　250
れきどく催し物ガイド　228
歴史研究会だより　237　歴史文学賞募集　255　雑誌案内　264
伝言板　262　次号予告　267　編集後記　268

れきどく図書室
歴史・時代小説をよむ……縄田一男　230
書斎訪問「紀田順一郎さん」　235　BOOK REVIEW　232
今月の新刊　236　新人物往来社出版案内　269

◉特別記事
大神神社における神仏分離について…アントーニ・クラウス　178
◉ずいひつ
北　博昭／二・二六事件の周辺……172
小松健一／旅人のこころ……174
藤川桂介／わたしと世阿弥……176
◉連載
古道逍遙　④中華人民共和国・蜀の桟道……今谷　明　188
歌舞伎入門　④大道具・小道具……小山觀翁　192
六法全書が裁く「歴史事件簿」　④殺しの相手……大久保治男　194
養老夜話　④老いらくの性……氏家幹人　202
新時代考証秘帳　③吉原慕情……稲垣史生　211
城郭研究最前線〈特別篇〉　⑪安土城……千田嘉博　198
ザ・パーティ・イン上海　⑦満蒙は日本の生命線……西沢教夫　216

連載小説　続・會津士魂……早乙女貢　238

©RD1994　目次デザイン／オフ　写植／池袋工芸　表紙／テレビ『水戸黄門』レギュラーのみなさん